

壽里 順平

コスタリカ人の合言葉

コスタリカ人の代表的な「合言葉」に、出会うと別れの挨拶に使われる「Pura vida」がある。この国の人々の明るさ、遊び心を代弁する合言葉で、観光案内書や旅行案内にも必ず出てくる。実はその成立や経緯は明らかであるとはいえない。スペイン語の「puro」(まったくの)と「vida」(命)を合わせて「気分最高」を連想できるが、形容詞「puro」が名詞に前置された慣用句には「pura mente」(真つ赤な嘘)など、確立した熟語に限られる。そのためかコスタリカのスペイン語辞典をめくっても、記載されていないことがある。

この表現はM・A・Qパチエコによる『コスタリカ用語辞典』(一九九二年初版)の第六版目(一九七一年)に「pura vida」を見出し語に間投表現(主に挨拶)として記載、後継者による改訂版『新コスタリカ用語辞典』(一九九一年)では形容詞「感じのよい」から気に入った、愛らしい、いかしている、すばらしい、副詞「文句なし」、間投詞(若者間の挨拶)という風に、間投詞の用法から多品詞化に広がっている。同系の辞典には「農民語」と卑下するものもある。上向き成長の「pura vida」の自国認知を拒む理由は何か。新造語に対するブレーキを意図するのか、出所が下品なためか、公にされていない。同国の日刊紙『ラ・ナシオン』も「ことばの法廷」という連載コラムで語学者の対応を保守的であると糾弾している。コスタリカ発祥語でないことを知ったのうえで無視しているのだから。

あるときメキシコ映画史上の主要作品を見る

ため、私はメキシコ国立映画アーカイブに通った。中米カリブ諸国の大衆文化に大きな影響を与えたメキシコ映画、音楽が戦後五〇年代に最盛期を迎え、役者の奇抜なギャグや言い回しが大衆の間で広がった。この時代の筆頭だった喜劇俳優カンティンフラスの創作した「*Ahi está el detalle*」(そこが訳ありだ)は、今も同地域でよく使われている。「Pura vida」もそのひとつではないのか。時代的には一致する。

最近、同年配のメキシコ人にその話をすると、「それは映画「Pura vida」のことに違いない」といい、「その映画の主演者はクラビヤソで、喜劇映画時代の三人衆のひとり」という。クラビヤソは、めっぽう口が立つが行動が唐突で失敗を重ねる。身ぶり手ぶりで相手に「プー・ピーダ!」「最高!」「良すぎる!」「超可愛い」を連発し忙しく動き回る。貧困層を対象にしたチャップリン調だが、映画「Pura vida」では主人公が上層部を相手に、口の立つインテリ役を売り物にしている。メキシコの知人は「変てこな帽子と饒舌さはカンティンフラスに似ているが、語調に品があった」そうだ。

今もコスタリカでは「Pura vida」は「最高」「完璧」「超可愛い」という意味で使われているが、メキシコで私が使ったら「意味はわかるが、話し手の年もわかる」といわれた。メキシコにおける命は尽きている。出どころは他国であっても、コスタリカ人はそれを健康的な、よい意味で(聴き手に元気を与える)コスタリカ調の慣用語にしている。自己卑下をやめて、もつと自国語に自信を持つてはどうかと思う。

すさと じゅんぺい/早稲田大学名誉教授

1936年東京生まれ。卒業時に政治経済学部から法学部大学院に転部入学したが、スペイン語ばかりを勉強した。通訳ガイドをして無料授業と報酬を受け、中南米旅行に費やし、定年後も旅行が不治の病。